
河童と女神と夏休み～あたしの遠野物語～

橘伊津姫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

河童と女神と夏休み〜あたしの遠野物語〜

【Nコード】

N5209T

【作者名】

橘伊津姫

【あらすじ】

夏休みを利用して、岩手県・遠野のおばあちゃんの家にてかけたメグミ。

そこには赤ちゃんを生んだばかりのママが待っているはずだった。でもパパもママも赤ちゃんにメロメロ。

構ってもらえない事に怒ったメグミが放った一言が、とんでもない事態を引き起こして……。

リンク友達「うらやまのひみつきち」漣さまに捧げます。

自サイト「皓月迷宮」にて公開中。

遠野へ

その夏、赤ちゃんを産んだママが里帰りしているおばあちゃんの家、パパと二人で行く事になった。

おばあちゃんの家は、岩手県遠野市。民話や昔話がたくさん残ってるって聞いたけど、そんなのどーでもいいや。

「もうすぐだぞ。メグミも赤ちゃんに会うの、楽しみだろう?」

パパは朝から機嫌がいい。

「病院で会ったきりだもんなあ。だいぶ大きくなったかな。早く会いたいだろ?」

「別に……」

ついこの前、病院を退院したんだもん。いきなり大きくなってわけ、ないじゃん。

「馬っ鹿みたい」

どんどんおばあちゃん家に向かって走る車の中から、窓の外をながめて小さくつぶやいた。

ああ、つまんない、つまんない。

そりゃあ、ママに会えるのはうれしいけど。もう二週間以上も会ってないし。

車はにぎやかな通りを抜けて、山の方へ向かって進んで行く。駅前を過ぎると、とたんに周囲はさびしくなっていく。

「なあんにもないじゃん」

畑とたんぼと山。それだけ。

「静かでいいトコだぞ」

そう言えば、パパもここらへんの出身なんだっけ。

「まだ着かないの?」

「んん? ああ、もうすぐだ」

さっきから、そればかり。

あーあ、学校みんなは夏休み、楽しんでるんだろーなあ。

「あきちゃんは遊園地に行くんだって。たかちゃんは、今年は海外に旅行って言ってたよ」

「へえ、そうか。でもメグミだって、出かけてるじゃないか。おばあちゃん家まで、旅行だろ？」

バックミラー越しに、パパが話しかけてくる。

……やっぱり、分つてないや。

アタシが大きなため息をついている間に、車はおばあちゃん家の前に着いた。

数えるほどしか来た事はないけど、来るたんびに思っただよね。

「相変わらず、おつきい家だなあ」

今風の家じゃなくて、一階建ての古い木造の家。アタシの住んでる所じゃ考えられないくらい、広い庭。

その庭の隅に車を停めると、パパは大きくノビをして言った。

「さあ着いたぞ、メグミ。荷物を運ぶの手伝ってくれ」

「はい」

気のない返事をして、車のトランクから大きなカバンを引っ張り出す。

「ったく。何でこんなに荷物が多いのよ？ 何ヶ月も旅行するわけでもないのに。」

パパは荷作りがヘタ。必要か、そうでないのかも考えず、目に付くモノは何でもカバンに入れてしまうから。だからいつだって、出かける時は大荷物になっちゃう。

それでも、ずい分減らしたのに……。

深くて大きなため息をついて、子供でも入っているんじゃないかと思うようなカバンを運んだ。

「こんにちはー。お世話になります」

開け放ちになっている部屋の縁側に荷物を置いて、パパは奥に向かって声をかけた。

「ああ、いらつしゃい。遠いところ、良く来たねえ。疲れたでしよう」

エプロン、じゃないや。「カツポウギ」とかって言う、ダブダブの服を着たおばあちゃんが出てきた。

「あらあら、メグミちゃんかい？ 大きくなって。お久しぶり。おばあちゃんの事、覚えてるかい？」

シワシワの顔、細い目、カサカサの手。アタシの覚えているおばあちゃんより、もっともつと「年寄り」に見えた。

何か言わなきゃと思ったけど、結局、何も思いつかなくて、ペコリとおじぎだけをした。

「こら、メグミ。ちゃんとあいさつしなきゃ、ダメじゃないか」

パパがしかめっ面でアタシに向かって言うから、しかたなく小さな声で「こんにちは」とボソボソあいさつした。

「いいよ、いいよ。久しぶりなもんだから、勝手が分からんのでしよう。さあメグミちゃん、上がって上がって。お母さんが待ってるよ」

細い目がシワにうもれて見えなくなるほどニコニコしながら、おばあちゃんが奥の部屋の方を指差して教えてくれた。

「どうも」

アタシはもう一度頭を下げて、縁側からおばあちゃん家に入り込んだ。

ちよつと薄暗くって、知らない匂いのする部屋を横切って行くと、後ろでパパがおばあちゃんに話している声が聞こえた。

「すみません、お義母さん。何だか今朝から、あんな調子なんです。反抗期ですかね？」

「女の子は、みんなそうよ。どうしたってね、女の子には難しい時期があるんだから」

ふん、放っておいてよ。

ツルツルでピカピカの廊下を歩いていくと、障子にガラスをはめ込んだ引き戸があつて、そこからママがいるのが見えた。

「ママー、来たよ！」

勢い良く戸を開けて、アタシは部屋に飛び込んだ。

平気なふりをしていたけど、やっぱりさびしかったから。

学校から帰っても、朝になっても、夜寝る時だって、ママはいない。

いつも「おかえり」って言うてくれて、「起きなさい」って言うてくれて、「おやすみ」って言うてくれてたママがいない。そんな日が二週間以上も続いてた。

ママに会えるのだけが楽しみで、こんな所まで来たんだもん。

ママだって、きっと。

「メグミ、大きな声出さないで。今、赤ちゃんが寝たところなんだから」

「え……？」

ママ？ うれしくないの？

ママは両腕に赤ちゃんを抱いて、布団の上に座って、ちょっとだけ怒った顔をしてアタシの事を見ていた。

「ご……ごめんなさい」

何だろう。どうしてママはアタシを見て、笑ってくれないんだらう？

「ああ、ここにいたのか。どうだい、赤ちゃんの様子は？」

アタシの後ろからヒョイと顔を出したパパが、部屋の中のままだに声をかけた。

「いらっしやい、パパ。疲れたでしょう」

「いや、大した事ないよ。自分の実家と距離はほとんど変わらないんだから」

「そうだったわね」

パパの言葉に、ママは少し笑顔になった。

アタシには笑ってくれないのに……。

「あらら、残念。寝ちゃった？」

「今ね。なかなか寝てくれないのよ、この子ってば」

「ちよっと抱かせてもらっても、いいかな？」

「どうして、かしこまるのよ。自分の子供なのに」

二人は楽しそう。アタシがここにいるの、忘れちゃったみたい。パパはママの腕から赤ちゃんを受け取ると、コワレモノを触るようにして、そっと抱きかかえた。

パパ、とけちゃいそうな顔。タレ気味な目をもっとタレ目にして、赤ちゃんをのぞき込んでる。

「ちゃんと名前、出してきてくれた？」

「ああ、ちゃんと出してきたよ」

そう言つて、パパはアタシに向かって赤ちゃんの顔が見えるように、体の向きを変えた。

「ほら、メグミ。この子の名前は『エミ』だよ。『笑う』に『美しい』で、『笑美』って言なんだ。カワイイだろ？ メグミの妹だよ」
パパの腕の中の「妹」は、正直、あんまりカワイイとは思えなかった。

赤い顔、ペツシャンコの鼻、カワイくないよ。

ようやくママが、アタシの方を見てくれた。ホッとした。良かった、忘れられたわけじゃなかったんだ。

「メグミ、元気だった？ ちゃんとパパの言う事を聞いて、いい子にしてたかしら？」

「うん、いい子にしてたよ」

ママの布団の横に座る。話したい事が一杯あつて、聞いてほしい事が一杯あつて。

ママにギュツとしてほしかった。

「ママ、あのね」

アタシが話し出そうとした時。

「ふにゃあ……」

パパの腕の中で眠っていたはずの「妹」が鳴き声をあげた。

歯が一本もない口を大きく開けて、体をふるわせて泣いている。

「ああ、起きちゃったのね。おっぱいはさっき飲んだから、オムツかしら？」

せっかくアタシの方を見ていたママが、赤ちゃんの方を向いてし

まった。

パパの腕から赤ちゃんを抱き取り、布団の上に寝かせてベビー服をまくる。

「お姉ちゃんに、あいさつしようと思ったんだよな」

「そんなわけ、ないじゃない。きっと、メグミの声が大きかったのよ」

何、アタシのせいなわけ？

紙オムツを広げると、赤ちゃんのオシリをふいて新しいオムツと取り替えた。

あー、あー、とむずがる赤ちゃんを胸元に抱いて、優しく揺らしながらあやし始めるママ。

「ダメねー。お姉ちゃんなのにねえ」

もうママは、アタシの事を見ていない。

パパもママも赤ちゃんをのぞき込んで、口はパパ似ね、とか、鼻はママにそっくり、とか話してる。

アタシはだまって部屋を出ると、庭に面した居間の縁側に腰かけて空をながめた。

「……つまんないの」

縁側にゴロリと転がる。空が高くて、青い。庭の木にとまってるセミの声が、まるで降ってくるみたい。

「おや、メグミちゃん。どうしたの、こんなトコロで」

麦茶の載ったお盆を持ったおばあちゃんが、ビックリした顔でアタシを見ていた。

「赤ちゃんには、会ってきたかい？」

アタシの隣に座ると、おばあちゃんが聞いてきた。

赤ちゃんの話なんて、したくないよ」

わざとふくれっ面になって答えないと、おばあちゃんはアタシのほっぺたを指でツンツン、と突いてきた。

「まあまあ、カワイイお顔が台無しよ」

「カワイくなんかないもん。パパもママも、赤ちゃんばっかりかわ

いがつて。きつとアタシの事なんか、どうでもよくなっちゃったんだ」

「そんな事ないわよ。お父さんもお母さんも、メグミちゃんの事が大好きよ」

「もう、いいよ！ どうせ、アタシのいる場所なんかないんだから！」

勢いをつけて起き上がると、縁側の下にあつたクツをはいて庭へ飛び降りた。

「メグミちゃん、どこに行くの？」

驚いたおばあちゃんが、半分くらい腰を浮かしてアタシを見てた。

「つまらないから、外に出てくる」

「暗くなる前に、帰って来るんだよ」

おばあちゃんの言葉に振り向きもしないで、アタシは庭を走り抜けた。

兄妹との出会い

おばちゃんの家裏手にある、小さな路地。その路地の突き当たりに、川があった。コンクリートで固められてない、石ころと草の匂い。

川には小さな橋がかかっている。その上からのぞいて見ると、すごく水が澄んでいて、川底の様子まで良く見える。

なのに、何だか深そうで、不思議な感じ。それでも気持ちがいらいらしているアタシには、太陽を反射して光って流れる川のキレイさなんて、ちつとも心を動かされるモノではなかったんだけれど。

橋を渡ると、土手に転がっていた小石を蹴飛ばし、手近な草をむしり取って川へ放り込んだ。

「来なきゃよかった。全然、楽しくない。すつごく、つまんない」
妹なんか、欲しくなかった。赤ちゃんなんて、大キライ。パパもママも、赤ちゃんの方がいいんだ。もうアタシの事なんか、いらなくなっちゃったんだ。

そう思ったら、悲しくて、くやしくて、涙が出てきた。

「もう、ヤダ……」

自分の怒りをぶつけるようにして、アタシは手当たり次第に雑草をちぎっては、川の流れに投げ込んでいた。

「そんな事してると、川を汚すなってカッパが出てくるよ」

後ろから急に声をかけられて、アタシはビックリして川に落ちそうになった。

「キャア！」

「わああ！」

アタシに声をかけてきた誰かも、驚いてアタシの服のすそをつかんで引つ張ってくれた。強い力で後ろに引かれて、そのまま土手の上にしりもちをついてしまった。

「いったあゝい！」

スカートじゃなくて良かった。でも、せつかくのお気に入りのジーンズが、泥だらけ。

「大丈夫かい？」

オシリをさすって痛がっているアタシの目の前に、誰かの手が差し出された。見上げると、同じ年くらいの知らない男の子が立っていた。

「誰よ、あんた？ 急に声かけてくるから、ビックリしちゃったじゃない」

ムカついたから、足手がせつかく差し出してくれていた手を払いのけると、アタシは自分で立ち上がってオシリをはたいた。

んもう。草と泥がくっついて、キレイにならない。

「ごめん。そんなに驚くと思わなかったんだ」

陽に焼けた顔をした男の子。良く見ればその背中には、妹らしき小さな女の子がかくれている。

「君、この辺りの子じゃないだろ？」

両手についた泥に顔をしかめながら、アタシは男の子をにらみ付けてやった。

「だから、何？ 聞いてんのは、こっちなんですけど」

思いつ切り機嫌の悪いアタシの声に、ビクツとして女の子は、男の子の背中にましますかくれてしまった。

何よ。人の事、鬼かなんだとも思ってるワケ？

「そんなに怒るなよ」

「川に落ちそうになったのよ。怒るに決まってるじゃない」

「だから、謝ったじゃないかよ」

ふん。あんなの謝ったうちに入らないわよ。

「オレ、リュウって言うんだ。『流れる』って書いて、リュウ。そんでコイツが、ミギワ。『さんずい』に『丁』って書くのさ。オレの妹。君は？」

「はあ？ 何でアタシまで、名前言わなきゃいけないのよ？」

「オレ達は、ちゃんと名乗ったじゃないか。次は、君の番だよ」

アタシは二人から目をそらすと、ふてくされた感じで答えた。

「メグミ」

「メグミちゃんかあ」

「気安く呼ばないでよ！」

さつき会ったばかりの子に、どうして『メグミちゃん』なんて呼ばれなきゃいけないのよ！

「じゃあ、なんて呼べばいいのさ？」

流と名乗った男の子の背中から、ようやく顔を出した女の子
汀、だっけ？ が、オズオズと口を開いた。

「メ、メグミちゃん……」

メグミちゃん？ 気持ちそのまま、視線に出ちゃったんだろ
う。

「ふあっ……」

泣きそうな表情になって、あわてて流の背中にしがみつく。

あーあ、もうカンベンしてよお。

「分かったわよ……。『メグミちゃん』でいいわよ」

ため息をついてそう言くと、汀、汀ちゃんは安心したように、ちよつと笑って見せた。

まあ、確かにアタシも態度、悪かったしね。

出合いは最悪だったけど、アタシは流と汀ちゃんの兄妹と一緒にいる事が多くなった。

別に待ち合わせをするワケでもないし、お互いの家を知ってるワケでもなかったけど、毎日、小川に行けば二人に会えた。

ここにはアタシの知ってる人なんかいなかったから、二人と話ができるのは、正直、うれしかった。

おばちゃん家にいても、アタシはする事がなかったし、パパもママもアタシがどこに行こうと興味がないみたいだったし。

流はアタシと同じ十歳で、妹の汀ちゃんは六歳。体の弱かった汀ちゃんは、あまり外で遊んだ事がなくて、友達がいないんだって。

「へつただなあー。こんなの、簡単だろ？」

「そんな事言ったって、アタシは初めてやるのよ。うまくできるワケないじゃない」

「だから、教えてやったじゃないか」

「あんな説明じゃ、分かんないよ」

言い合いをするアタシと流の間で、汀ちゃんがオロオロと二人の顔を見比べている。

何を言い争っているのかと言うと。

「こつやるんだって。見てろよ」

流は足元の平べったい石を拾い上げると、勢い良く腕を振った。

その手から飛び出した小石は風を切り、小川の水面に触れたと思っただとたん、大きく弧を描いた。

連続した波紋を残し、小石は水面を踊るように跳ねて行った。

「すこ……」

思わず見とれちゃったアタシに、汀ちゃんがニツコリ笑って自慢げにアタシに言った。

「お兄ちゃんは、水切りがすごく上手なんだよ」

汀ちゃんを見てると、本当にお兄ちゃんの事が大好きなんだなあ、って思う。流の方も、そんな汀ちゃんがカワイくて、仕方がないみたい。

「ほら、メグミちゃんもやってみなよ。腕を振る時は、水平になるようにな」

さつき流が拾ったのと同じような、平べったい小石を選んで、アタシは教えられた通りに川に向かって投げてみた。

小石は水面に当たると、そのまま沈まずに連続して跳ねた。

「ヤッター！」

たかがこれだけの事なのに、柄にもなくアタシはハシャいでしまった。

「やったね、メグミちゃん」

汀ちゃんが両手を叩いて、喜んでくれる。

「やるじゃん」

「まあね」

TVゲームも何もない。オシャレなお店も何もない。だけど、流
と汀ちゃん達二人といると、そんな事はどーでも良かった。

二人はちゃんとアタシの話を聞いてくれた。愛想笑いや、付き合
いで話を合わせてるんじゃないって分かるから。

三人で土手に座って、川の流れをながめた。

河童淵

「ねえ、この川の名前って『カッパ淵』って言うのよね？ どうして？」

ふと思いついて、アタシは二人に聞いてみる。だって、変な名前でしょ？「カッパ淵」なんて。

「ああ、そっか。メグミちゃんは『カッパ淵』の昔話を知らないのか」

土手に生えている草の葉っぱを千切って、クルクル回していた流しが目を丸くした。

「何だか、もうずーっと一緒に遊んでるみたいな気がしてたから、カッパ淵の話も知ってると思ってたよ」

そう言って流と汀ちゃんの兄妹は、名前の由来を聞かせてくれた。

昔、むかあしのお話。

土淵の新屋という家の裏に、とっても深い淵があったんだそう。ある夏の暑い日、その家の若者が馬の足を冷やしてやろうと、淵へ馬を連れて行き、そのまま遊びに出かけてしまったんだと。

そうしたらそこへカッパが出て来て、馬を淵の中へ引きずり込もうとしてな。ビックリ仰天した馬はカッパをぶら下げたまんま、馬屋に逃げ帰ってきたそう。

今度はカッパの方が驚いて、馬のエサ桶を引っくり返して、その中に隠れていたんだと。

家の者達が「どうして馬だけが帰ってきたんだろうか？」と不思議がって、馬屋をのぞいて見たんだと。

そしたらエサ桶が引っくり返って、小さな手が見えたんだと。

開けて見たらば、そこにはカッパが隠れておってな。

集まって来た村の衆が「このカッパ、いつもいつも悪さして、ろくでもねえから殺してしまえ」と言い出したんだが、見つけられた

河童は涙を流しながら手を合わせて言ったんだと。

「もう悪さは二度としねえから、命だけは助けて下され」

新屋の主人は可哀想になって「これからは、ここの淵で絶対悪い事すんなよ」って、許す事にしたんだと。

カツパも言う事を聞いて、そこから遠く離れた奥沢の淵に引越したんだとさ。

「この川は元々、大人の腰ほどもある深さの淵だったんだ。それを今は、川底を埋めて浅くしてあるのさ。これじゃあ、カツパは住めないかもね」

「ええ？ だって、おとぎ話でしょ？ 川が深くったって浅くたって、カツパなんかいるワケ、ないじゃない」

流の話を聞いて、アタシは思わず鼻で笑ってしまった。

だって、カツパよ、カツパ？

この科学も進んで、人が宇宙にまで飛び出そうとしている時代に、カツパですって？

「どうして？ どうして、いないと思うの？」

汀ちゃんが、不思議そうな表情でアタシに問いかけた。

「どうして、って……。もしかして、汀ちゃんは信じてるの、カツパ？」

反対にアタシが聞き返すと、汀ちゃんは素直にうなずいた。

「私は、いると思うな。ここのちよつと先にね、常堅寺っていうお寺があるの。そこのお寺がね、火事になっちゃった事があるって、カツパ淵のカツパがお皿の水で火を消してくれたお話があるのよ。カツパをお祀りした『カツパ狛犬』だってあるんだから」

笑い話……ではなさそう。ネタ……でもなさそう。

流も汀ちゃんも、大マジメな顔をしている。

「カツパ狛犬？」

狛犬って、犬って言うぐらいだから「犬」じゃないの？ あの神社の鳥居のそばにある、石の犬の事でしょ？ 和風のライオンみた

いな。お寺なのにそれがある事自体、何か間違っているような気が……。

「見に行く？」

汀ちゃんが首をかしげて聞いてくるのに、また今度ね、と手を振って答えた。

気がつけば、太陽はずい分とかたむいて、空も赤くなっている。今、何時頃だろう？

ポケットから携帯電話を取り出して見てみると、時間は五時半を少し回ったあたりだった。

そろそろ、おばあちゃん家に帰らなくちゃ。この辺りは、暗くなるのが早いから、油断しているとすぐに夜がやって来る。

「あーあ、帰らなくちゃ」

「何、メグミちゃん。帰りたくないの？」

アタシの弦きを聞きつけて、流が妙な顔をした。

「だって、お父さんもお母さんも待つてるんだろ？ 赤ちゃんだって、メグミちゃんを待つてるんじゃないの？」

「そんな事、あるワケないじゃん。まだ生まれたばかりの赤ちゃんなんだよ」

せつかく忘れてたのに、思い出しちゃったじゃない。

「それに パパもママも赤ちゃんに夢中で、アタシの事なんか、どーでもいいんだよ」

おばあちゃん家に帰ったって、アタシの事なんか誰も見てないんだから。

「みんな、赤ちゃん赤ちゃんって。アタシがいなくなっても、きっと誰も気がつかないよ」

赤ちゃんが生まれてから、家にいても楽しくない。赤ちゃんがアタシのパパとママを取っちゃったんだ。

「アタシの話なんか聞いてくれないし。何かって言うと、赤ちゃんの所に行っちゃうし」

ずっと思っていた事を、アタシは流にぶちまけた。

「赤ちゃんなんて、うるさく泣いて、おっぱい飲んで、オムツ汚すしかできないくせに」

「うん、そうだね。だからだよ」

「え？」

思わず、流の方を見る。

夕焼けに照らされて、流の横顔はオレンジ色に染まっている。

「泣いて、飲んで、出して、寝る。それが赤ちゃんの仕事だ。逆に言えば、それしかできないんだよ、赤ちゃんは。だからお父さんもお母さんも、何もできない赤ちゃんに手をかけるんだ。だって、メグミちゃんは、自分の事が自分でできるだろ？」

「そりゃ」

そりゃ、そうだけど。

「そんな事言ったって、アタシだってまだ子供だよ。パパやママに話を聞いてほしい時だって、あるのに……」

「うん。分かるよ。オレもそうだったから」

「流も？」

「うん。汀が生まれた時、オレも同じように思った。だからメグミちゃんの気持ちも、良く分かる。でも今は、汀の事力ワイイと思ってる。メグミちゃんもきつと、妹の事を力ワイイと思えるようになるからさ」

本当に、そんなふうに思えるようになる日が、来るのかな？

「だからね、メグミちゃん。赤ちゃんの事を知らないだなんて、そんなふう言っちゃダメだよ。そんな事を言っていると、早池峰の神さまが来て、赤ちゃんを連れてっちゃうからね」

流と汀ちゃんと別れて、おばあちゃん家に帰ったのは、辺りがずい分と暗くなってからだった。

思っていたよりも長く、二人と話し込んでみたい。

ただいまと声をかけて家の中へ入ると、ちよっと怒った顔をしたパパと、心配そうな顔をしたおばあちゃんが待っていた。

「メグミ、こんなに暗くなるまで、どこに行っていたんだ？ おばあちゃんが、すごく心配してたんだぞ」

おばあちゃんが？ おばあちゃんだけなの？ パパの言葉に、アタシは力チンときた。

「パパは？」

「何だつて？」

「パパはアタシの事、心配してくれたの？ それとも、赤ちゃんの方が大事で、アタシの事なんか忘れてた？」

思いつ切りパパをにらみつける。

「そんなはず、あるワケないだろう！」

「ウソばっかし。アタシの話も聞いてくれないくせに！ アタシの事なんか、どうでもいいくせに！」

止まらないんだもん。自分でも、こんな事言っちゃダメだって分かってる。けど、一度口にしたら、もう止められないんだもん。

爆発しちゃった気持ちをどうしようもなくて、アタシは怒ってるパパの横をすり抜けて駆け出した。

後ろで、アタシの名前を怒鳴っているパパと、落ち着くように言っているおばあちゃんの声がした。

アタシだって怒ってるんだから。アタシ、大人じゃないんだよ。まだ子供なんだよ。

どうして分かってくれないんだろう？ そう思ったら、涙が出てきて止まらなくなってしまった。

ママに会いたい。ママにギュッって抱きしめてもらいたい。ママに頭をなでてもらいたい。

アタシはママの寝ている部屋に、飛び込んだ。

「ママ！」

勢いよく引き戸を開けると、中にいたママが口元に人差し指をあてて、シートと言った。

「今ようやく、眠ったところなのよ。静かにしてちょうだい」

そう言くと、胸に抱っこしていた赤ちゃんを布団に寝かしつけた。

「ママ、あのね」

「メグミ、後にしてくれない？ 笑美が眠っている間に、少しでも休んでおきたいのよ」

話しかけようとするアタシの言葉をさえぎって、ママは首と肩を回した。

「夜もあんまり眠れないんだから。お話なら、パパに聞いてもらいなさい」

「ママ！ アタシの話を聞いてよ！」

頭にきたアタシが大きな声を出すと、それに驚いた布団の赤ちゃんが、ふええと泣き出してしまった。

「ほらもう。メグミが大きな声出すから、笑美が起きちゃったじゃない」

ママはアタシの事をにらむと、ぐずる赤ちゃんを布団から抱き上げた。

「ママ、ねえ！ 話を聞いてってば！」

アタシは必死になって、赤ちゃんを抱いているママの腕を引っばった。

取らないで、取らないで、アタシのママよ。取らないで、返してよ！

「メグミ、いい加減にしてちょうだい！ そんなに引っぱったりしたら、笑美を落としちゃうでしょ。あなた、お姉ちゃんだから、妹にイジワルしないの」

そして視線を赤ちゃんに戻すと、あやしなから優しい声で

「ダメなお姉ちゃんねえ」

と語りかける。

「ママのバカ！ アタシ、お姉ちゃんじゃないもん。お姉ちゃんになんか、なりたくない。赤ちゃんなんかいらぬ。妹なんか、どっか行っちゃえ！！」

「メグミ！！」

バカバカバカ！ ママなんか、大っキライ。パパなんか、大っキ

ライ。赤ちゃんなんか、大っキライ。妹なんか、大っキライ。みんな、大っキライ！

どうしてママは、赤ちゃんばかりを大事にするの？ どうしてパパは、アタシのことを心配してくれないの？ どうして二人とも、アタシを見てくれないの？

どっか行っちゃえ！ 赤ちゃんなんか、どっか行っちゃえ！

アタシは廊下と部屋を走り抜け、自分用に与えられていた部屋に駆け込んだ。

フスマをカー杯閉めると、アタシは押入れの中にもぐり込んだ。パパの顔も、ママの顔も見たくない。声も聞きたくない。

押入れの狭いスペースに、毛布にくるまって声を殺していたアタシは、うずくまったまま少し眠ってしまったみたい。

「……グミ……メグミ……」

どこからか、アタシを呼ぶ声がした。

あたしの願い

『メグミ』

その声に薄く目を開けると、白い光が視界に飛び込んできた。スゴく、まぶしい。

『メグミ』

アタシを呼ぶ声は、白い光の中から聞こえてくる。目をこすってよく見ると、光の中に何かがいるのが分かった。

「何？ 誰？」

少しずつ光に目が慣れてくると、大きな動物のような影と、その動物に乗った人影が見てとれた。

『メグミ』

影が光の中から進み出てくる。

「 鹿？」

光の中にいたのは、雪のように白くて額に金色の星のある、大きな鹿。そして、その鹿に腰かけている、とってもキレイな女の人だった。

女の人は長い髪をいろんな花で飾り、昔話の そうです、七夕の織姫さまみたいな ヒラヒラした着物を着ていた。

『メグミ』

アタシの名前をずっと呼んでいたのは、どうやら、この女の人みたい。

「はい、メグミはアタシです。あなたは誰ですか？」

アタシが答えると、女の方はちよつとだけ笑ったような気がした。『わたくしは、早池峰奥宮^{はやちね}。そなたに話があつて、降りて来ました』ずい分と不思議なしゃべり方をする人だなあ。おばあちゃんが見てた、時代劇に出てくる役者さんみたい。

「話？ アタシに？」

『そう、そなたにです。そなた先程、赤子はいらぬと願いましたね

？　それがまこと、真実であるならば、わたくしが赤子をもらつてゆきましょう』

「え、でも」

確かに、いらないと思った。どこかへ行っちゃえ、とも。

『赤子がいなくなつてしまえば、父も母も、そなたを愛してくれると、そう思ったのでしょうか？　ならば、わたくしがその願いを叶えてあげましょう。そなたがいらぬと言つた赤子、わたくしがもらつてゆきます』

女の人がそう言つたとたん、鹿の額にある星が輝き出し、アタシはまぶしくて目を開けていられなくなつた。

『忘れてはいけませんよ。赤子は、わたくしのもんです。確かにわたくしが、もらいましたよ。覚えておくのですよ、メグミ』

待つてよ！　そんな、いきなり……。待つてよ、ねえ、待つて！　アタシは水の中でもがくように、消えていく光を追いかけようとした。

「待つて！」

『忘れてはいけませんよ、忘れては。いいですね、メグミ』

小さくなつていく光の点に手を伸ばした時、アタシは肩を揺さぶられるのを感じた。

「……グミちゃん、メグミちゃん」

細く目を開けると、おばあちゃんがアタシをのぞき込んでいた。押入れの中で眠り込んでいるうちに、すっかり夜になつてしまつたみたい。おばあちゃんの後ろから差し込む部屋の明かりが、妙に白く感じた。

「おばあちゃん……」

「まあまあ、こんなトコロで眠っちゃつて。お腹、空いたろう？」

そつか、眠つてる間に晩ご飯、食べそこねちゃつたんだ。

体に毛布を巻き付けたまま、押入れの中からはい出ると、おばあちゃんがお盆を差し出してくれた。

おつきめのおにぎりが二つ。お漬物の小皿とお味噌汁、熱そうな

お茶。

「ありがとう、おばあちゃん」

食べ物を見たたん、アタシのお腹はモーレツに抗議を始めた。
お味噌汁をひと口すると、体中にあったかさが広がった。

「おいしい」

両手を温めるみたいにお碗を持つアタシに、おばあちゃんは優しく笑いかけてくれた。

「よっぽどお腹、空いてたんだねえ」

「おばあちゃん、パパとママは？」

怒ったまんまで飛び出して来ちゃったから、二人の事が気になった。

「大丈夫よ。お父さんもお母さんも、今はちょっと余裕がないのよねえ。二人には、おばあちゃんから話しておくわ」

「うん……」

「安心なさい。お父さんもお母さんも、メグミちゃんの事を嫌いになつたりしないわ。メグミちゃんの気持ちは、おばあちゃんにはよく分かるもの」

おばあちゃんの、大きな手。シワツシワデゴツゴツした手。その手で、アタシの頭をなでてくれた。

「アタシの気持ちは？」

「そうよ。おばあちゃんにはね、兄妹が四人いるの。兄さんとは年が離れていたけど、下の妹と弟とは年が近くてねえ。ちょうどメグミちゃんと同じくらいの頃だったかしら、妹が生まれたのは」

おばあちゃんは目を細めて、過去を振り返るようにして話してくれた。

「あの頃は今みたいに病院で産むよりも、家にお産婆さんに来てもらって、そこで出産する人が多かったかねえ。おばあちゃんのお母さん、メグミちゃんの曾おばあちゃんになる人も、お産婆さんと呼ばんで出産したのよ」

「家で……。じゃあ、ずっと曾おばあちゃんの側にいられたの？」

「それがねえ。子供は邪魔になるからって、朝から部屋にも入れてくれなかったのよ。子供だって、心配よねえ」

ママが病院に入院する時も、スゴく心配だった。あんなに大きなお腹で、夜中に急に苦しみ出して……。パパが大騒ぎしながら車で病院につれて行ったんだ。

でもアタシは子供だから、つれて行ってもえなかった。

「心配要らないから、おとなしく家で待ってなさい」

そう言われたってさ……。心配いらないって言われてもさ、ムリに決まってるじゃん。目の前で、お腹を抱えて痛がっていたママ。あの姿を見て、心配しない方がどうかしてる。

「出産には時間がかかってねえ。妹が産まれたのは、夜になってからだったよ。おばあちゃんは今もう、心配で心配で。でも、部屋に呼ばれたのは曾おじいちゃんだけ。そのうちに待ちくたびれたおばあちゃん、いつの間にか眠ってしまったみたいだね。朝になって部屋に入ったら、曾おばあちゃんは大事そうに赤ちゃんを抱っこしてたよ。おばあちゃん、何だか悲しくってねえ」

アタシと一緒に。ようやくママに会えたのに、ママはアタシのことを見てくれない。アタシに向かって掛けられる言葉は、全部赤ちゃんの事ばかり。

「大好きな母親を、赤ちゃんに取られちゃったような気になったもんさ。今のメグミちゃんみたいに。赤ちゃんなんかいらなくて、何度も思ったしね。だから、メグミちゃんの気持ちは良く分かるよ」おばあちゃんが渡してくれた湯呑茶碗。入っているお茶は少し冷めてしまったけど、それでも、アタシの手を温めてくれるには十分だった。アタシの手と、アタシの心を。

「さあ、食べ終わったら、ゆっくりとお休み」

食べ終わった皿と湯呑茶碗をお盆に載せて、おばあちゃんは部屋から出て行った。

アタシはおばあちゃんが用意してくれていた布団にもぐり込んで……。少しだけ泣いた。

布団は、お日様の二オイがした。
そして……あの奇妙な夢の事を、忘れた。

翌朝、アタシは家の中がなにやら騒がしくて、目が覚めた。

「何？　うるさい……」

部屋のフスマを開けると、誰かが大声で泣いているのが聞こえた。
ううん、あれは泣き叫んでいるんだ。

あわてて着替えると、アタシは声のする方へ走って行った。

叫んでいたのは……ママだった。

部屋の中にペタリと座り込んで、大声をあげて泣いていた。手には小さな毛布を握りしめて。そして　赤ちゃん用の布団には、誰も寝ていなかった。

「笑美が！　笑美がいないのっ！　あなた、笑美がなくなっただこへ行っちゃったの！？」　ねえ、あなた、笑美は！？」

「落ち着け、落ち着くんた。そんなに騒ぐと、体に障る。^{さわ}笑美の事は任せろ、絶対に探し出すから」

叫ぶママの肩を、パパがしっかりと押さえていた。

どうしたんだろう？　何があったの？

おばあちゃんがアタシに気が付いて、そつと廊下までつれ出してくれた。

「ね、おばあちゃん、何があったの？　ママはどうしちゃったの？」
アタシの質問に、おばあちゃんは部屋の方を気にしながら、説明してくれた。

「実は、笑美ちゃんがね　。夜中にお乳を飲ませた後、お母さんが目を覚ますまでの間に、いなくなっちゃったんだよ。家中の鍵も閉まってたし、雨戸もちゃんと閉まってたのに。誰も入ってきた跡はないんだよ。なのに、笑美ちゃんだけがなくなっ……」

赤ちゃんが……いなくなっただけ？

部屋をのぞき込む。ママはパパにしがみついて泣いていた。その側に敷かれたままの、赤ちゃん用のベビー布団。シーツの白が目

痛かった。

本当ならそこには、生まれて数週間の赤ちゃんが　アタシの妹
が寝ているはずなのに。

「やっぱりアレは、夢じゃなかったんだわ。アレが笑美をつれて行
ったのよ！」

ママが泣いている。パパも泣いている。

あたしの決意

アタシが見上げると、おばあちゃんは何とも言えない顔をして教えてくれた。

「……鹿がね。雪みたいに真つ白な鹿が、赤ん坊をもらうと言って、笑美をつれて行ったつて。そう言うんだよ。夢から目が覚めたら、もう笑美はいなかったんだつて……」

鹿？ 白い鹿つて？

アタシは夕べの不思議な夢を思い出していた。

雪のように白くて、額に光る星のある鹿。そしてあの、キレイな女の人。

『わたくしが、赤子をもらつてゆきましょう』

あの人はそう言った。

アタシが願ったから。赤ちゃんなんか、いらないつて。どこかへ行っちゃえつて。

「アタシの……せい？」

玄関に誰か来たみたい。

おばあちゃんが連絡したんだと思う。ちょっと太ったお巡りさんが、汗をふきながら立っていた。

「新屋しんやのばあちゃん、赤ん坊がいなくなつたつてのは本当かい？」

「ああ、駐在さんかね。よう来てくれたよ」

話を聞くためにやって来たお巡りさんを、おばあちゃんは玄関まで迎えに行った。

今なら。今なら誰も、アタシの事を気にしてない。

アタシはそつとその場を離れると、自分が寝ていた部屋に戻つた。白い鹿。女の人。赤ちゃん。どうしよう。アタシがあんな事、言つたせいだ。だから、本当に夢の鹿が現れて、赤ちゃんをつれて行っちゃつたんだ。

このままじつとしているワケにはいかない。だけど、どうしたら

いいんだろう？ 頭の中がグルグルする。

確かに、赤ちゃんなんていらないうって思ったし、いなくなれって思った。だけど、それで本当にいなくなるなんて、思ってたかったのに……。

フスマを開けて様子をうかがってみる。かすかに、おばあちゃんとお巡りさんの話し声が聞こえてきた。

「どうもなあ。誘拐というのは、違うような気がするんじゃないが」

「そうは言っても、赤ん坊がいなくなったのは……」

「ばあちゃん、コレ、早池峰さんの『赤子取り』と違うんかい？」

「そんな。もうそんな時代と違うじゃろ」

「けど、誰かが外から入ってきたような跡は、どこにもないぞ。鍵もかかつとる。雨戸も閉まつとる。庭にも家の中にも、足跡一つ残っちゃおらん。しかも、子供の気配に敏感になつとる母親の横から、鳴き声もあげずに赤ん坊だけ盗み出すなんてのう」

「だからと言って、早池峰さんの『赤子取り』とは」

「第一、このちつこい町に、赤ん坊盗むような、心得違いの人間はおらんぞ」

早池峰さん？ どこかで聞いた事が。どこだったかしら？ とにかく、こうしてはいられない。だけど、どうしたら？

「流に。流に相談してみよう」

考えれば、流に相談したからって、何が解決するワケじゃないんだけど。でも、その時は、それが一番いい方法だと思ったんだ。

きっと、これからどんどん人が集まる。赤ちゃんを探すために、近所の人も警察の人も来るはず。人がたくさん来てからじゃ、家を抜け出すが難しくなるかも。

アタシはそつと部屋から出ると、玄関に向かった。人の話し声が近づいてくる。早くしなくちゃ。

玄関に飛び降りてクツをつかむと、そのままクツ下で走り出した。道端に転がっている小石が、クツ下を通して足の裏に食い込む。そ

の痛みが、アタシを責めているような気がした。

カッパ淵。いつもと同じ川の流れ、いつもと同じ風、いつも同じ
じ 流と汀ちゃんの兄妹。

「メグミちゃん」

アタシの先に気が付いたのは、妹の汀ちゃんの方だった。

「どうしたの、メグミちゃん？ クツモはかずに」

目を丸くした流が近寄ってくる。その顔を見たたん、アタシの中にあった細い糸が、プツンと切れたような気がした。

「流、どうしよう。赤ちゃんが、アタシのせいで。どうしよう、ねえ、どうしたらいい！？」

パパにもママにも言えなかった。言えるはずがなかった。おばあちゃんにだって、言えないよ。

「一体、どうしたんだよ？ 泣いてちゃ、分からないよ」

泣いてる？ アタシが？

気が付けば、ほっぺたを涙が流れていた。

「はい、メグミちゃん」

汀ちゃんが小さい手で、ハンカチを差し出してくれた。それを受け取り、アタシは二人に話し始める。

パパの事、ママの事、赤ちゃんの事、自分の見た夢の事、おばあちゃんから聞いたままの夢の話。そして 赤ちゃんをいらないつて言った、自分の事。

軽べつされるかと思った。せつかく仲良くなった、流と汀ちゃんの兄妹。その二人に軽べつされるのは、とても怖かった。

でも、二人にかくし事をしたくない。だから怖かったけど、正直に全部話した。

「赤ちゃん、いなくなっただんな？」

アタシの話聞き終わった流は、いつもと変わらない口調で尋ね返してきた。

「夢の中に、白い鹿が現われたんだな？」

「うん。額の真ん中に、金色の星のついた、白い鹿。それと、キレイな女の人」

あの女の人は、自分の事を何て言ってただろう？ よく思い出せない。

あまり耳にした事のない名前だったような気がするけど。

「お兄ちゃん、それって」

「間違いないだろうな。早池峰のお使いだ」

笑い飛ばされるかと思った。だけど流も汀ちゃんも、真剣な顔でアタシの話を聞いてくれる。

早池峰？ そう言えば、家に来たお巡りさんもそんな事、言ってたかも。

「はやちね……おくのみや……。そう言ってた。アタシの夢の中に出てきた、女の人」

記憶をふるい起こす。うん、確かにそう言ってた。

「奥宮って言ったのか？ それじゃ、早池峰の女神本人が出て来たって事になる」

早池峰の女神？ 何だろう、それって。

「あのね、メグミちゃん。この遠野の土地は、早池峰の山の裾野に広がってるの。そして、この土地を治めているのが、早池峰の女神。本当は神様っぽい、むずかしくて長ったらしい名前があるんだけど、でも私たちは『早池峰さん』って呼んでるわ」

「早池峰山の山頂に、小さな祭壇があるんだ。そこが奥宮。女神の御座所なんだ」

アタシの夢の中に出てきた女の人は、山の神様だったんだ。

「ねえ、お巡りさんがおばあちゃんに、『早池峰さんの赤子取り』って言ってたの。それって、どう言う事？ おばあちゃんは『時代が違っ』って言ってたけど」

ずっと疑問だった言葉。妙に心に引くかかる言葉。

「『赤子取り』か。まだそんな言葉、覚えてる人がいたんだ」

話をしているうちに、流の言葉使いがどんどん大人びていくよう

な気がした。

うつん、言葉使いだけじゃない。全身から感じるモノも、変化したような気がする。

「『赤子取り』って言うのはね、メグミちゃん。昔、この辺りにあった習慣の事だよ。北の土地の冬は厳しい。だから秋の収穫は、生きていくうえでとても重要だった。雨が長くても、反対に降らな過ぎても、米の出来に大きく係わるからね。特に暑くならない夏は、村人にとっては大問題だったんだよ。涼し過ぎると米が実らない。米が出来なければ、厳しい冬を乗り越える事は出来ない」

「前の年のお米とか、残ってないの？ それを合わせれば、冬を乗り切るぐらいにはなるんじゃない？」

「うん、そう考えるよね。でも昔は、一つの田んぼに対してかけられる税の割合は、厳密に決められていたんだ。出来不出来に係わらず、一年にこれだけ、と決められていた」

「歴史で習ったわ。年貢って言うのよね」

「そう。今みたいに室温を管理する施設がなかったから、そうそう長くは保管しておけない。そもそも、北国の地では余裕のある収穫は見込めない。年貢を納め、翌年の苗を育てるための米を除けば、食べていくだけで精一杯って事になる。暑くならない夏は、その力ツカツの米さえもなくなってしまっただ」

「どうして流は、こんな事を知ってるんだろう？ 流って、アタシと同じ十歳のハズじゃないの？」

「食べる物がなければ、母親は体力をつけられない。体力がなければ、お乳が出せなくなってしまう。そうすると、力のない赤ん坊は冬を越えられない。だから」

流は少し悲しそうな目をして、言葉が続けた。

「その年に生まれた子供を、山の女神に還すんだ。育てられず、また冬を越せそうにない赤ん坊を、早池峰の女神に願って引き受けてもらう。そうすると、お山の使いである白い鹿が現れて、赤ん坊を連れて行ってしまっただ。これが『早池峰さんの赤子取り』だよ」

それじゃあ……。連れて行かれた子供たちは……。

「子供たちは？　どうなるの？」

「早池峰山に連れて行かれた赤ん坊たちは、女神に育てられて、山頂にある『開慶水』（かいけいすい）という池の底の屋敷で暮らしてるって、言われてるわ。女神と一緒にね」

汀ちゃんが、そつとアタシの手を握って来た。その温かい感触に、アタシは何かを思い出した。

抱っこされた、ママの手の温度。一緒に眠った布団の中の、パパの体温。三人で食べたご飯の熱さ。お風呂のお湯。いろんなモノのいろんな温度。

でも、赤ちゃんの温度を思い出せない。

泣いているママの顔、怒っているパパの顔、笑っている二人の顔。でも、赤ちゃんの顔を思い出せない。

どんな顔をした？　どれくらいの大きさだった？　どんな手で、どんな足だった？

分らない。だって、触ってないから。だって、見てないから。

「アタシ　赤ちゃんの事、覚えてない……。アタシの妹なのに……」

涙が出た。今までの涙とはちがう。自分の事じゃなくて、赤ちゃんの事を考えて流れる涙。

「アタシ、ひどい事しちゃった……。どうすればいいんだろう？」

「それはね、メグミちゃん。君が決めなくちゃいけない事だ。オレや汀は、メグミちゃんを手助けする事は出来ても、決定を下す事は出来ないんだ」

アタシはゆつくりと顔を上げて、流を見た。

「メグミちゃん、私もお兄ちゃんも、メグミちゃんの味方だよ。だから言つて。メグミちゃんはどうしたいの？」

汀ちゃんがキュツと、アタシの手を握りしめてくれた。

アタシがしでかしてしまった事だから、アタシが決めなくちゃいけないんだ。

「流、汀ちゃん。アタシ、決めたよ」

泣いていたママの姿が浮かぶ。苦しそうなパパの顔が浮かぶ。悲しそうなおばあちゃんの後姿が浮かぶ。

「赤ちゃんを、取り戻しに行かなくちゃ。でも」

でも、どうやって？ どうやって助けに行けばいいんだろう？

「それがメグミちゃんの出した答えなら」

「私たちが、それを手伝うわ」

「さあ、こっちへ来て」

二人に手を引かれて、アタシは川べりを少し歩いた。

流と汀ちゃんが向かっているのは、小さな小屋？ うっん、お社だ。そばには、カップの像が二体。

「ここはね、『お乳の社』って言うんだ。赤ちゃんを産んだお母さんたちが、お乳の出が良くなりますように、ってお参りに来るんだ」

中をのぞき込んでみると、旅館なんかでよく見る、旅の思い出ノートみたいなのが置いてあった。

「ここからどうするの？」

「ここにはね、『赤ちゃんが無事に育ちますように』っていう、お母さんたちの願いがたくさんこもってるの。だから『赤ちゃんを助きたい』って思うメグミちゃんを、きつと守ってくれるよ」

そう言つて、汀ちゃんは側に生えていた草の葉っぱを二枚、ちぎりとつてアタシに渡してくれた。

「メグミちゃん、これね、『目隠し草』って言うの。これを目の上に置いてね」

細長い、小舟のような形をした、ツルツルの緑の葉っぱ。汀ちゃんの差し出してくれたソレを、アタシは受け取ってながめた。

「目の上に？ コレを？」

これで一体何をしようと言っただろう？

「オレたちを信じて、メグミちゃん」

「もちろん、信じてるよ！ 信じてるけど、何をどうするのかぐらい、教えてくれなきゃ……」

何も知らされないのは、ちょっと不安になる。

「きつとね、メグミちゃん、言っても君は信じないと思うよ。でも確かに、何も言われずにいたんじゃない、もっと不安になるかも知れない」

流がコワいくらい真剣な顔で、アタシを見た。とても自分と同じ年だと思えない。

「これから言う事は、とても信じられない事かも知れない。だけど、これだけは信じて。オレも汀も、メグミちゃんを助けたんだ」

流の力強い言葉に、アタシはうなずいた。

「この土地は、古くから山の神、川の神に守られて来た所なんだ。民話、神話が多く残るこの遠野は、不思議な力も多く残っている。さつき汀が言っていたように、人々の願いも強い力になるんだ。オレと汀はその力を伝って、早池峰の女神の社を飛び石にして、山頂の御座所までをつなぐんだ」

聞いただけでは、何が何だか分らない。だけど、二人がアタシをどうにか助けようとしてくれている事だけは、信じられる。

「 本当の事言って、よく分らないんだけど……。それでも、それでも、流と汀ちゃんの事は信じるよ」

そう。アタシ一人じゃ、どうにも出来ない。早池峰山へ行く事も、赤ちゃんを取り戻す事も。だから、二人に任せよう。二人の言葉を信じよう。アタシを助けてくれようとしている二人の気持ち、すごく嬉しかった。

「じゃあ、さつきの葉っぱを目に当てておいてね。周りの景色が変わる時に、気分が悪くなる人も、いるみたいだから」

「うん、分った」

アタシは言われた通り、『目隠し草』の葉っぱをまぶたの上に当ててみた。少しだけヒンヤリとした葉っぱは、不思議な事に手を離しても落ちてこなかった。

「それじゃあ、行くよ」

右手側から流の声がした。そして、二人が左右からアタシの手を

握る。

「しっかりつかまってるね」

左手側から汀ちゃんの声がする。アタシがそっとうなずくと、二人の声が重なった。

「飛ぼう!」「」

早池峰山へ

その瞬間、体がグラツとゆれたような気がした。

何だか体の周りの空気ごと、グンニヤリとゆがんでいるような、引つ張られているような、押されているような、とても変な感じ。

「メグミちゃん、大丈夫？」

汀ちゃんの声がする。

「うん、大丈夫……だと思う。さっきもらった葉っぱ、つけといてよかったよ」

本当にそう思う。目を閉じているから分ないけど、きっと周りの景色はグニヤグニヤに溶けて、グルグル回っているはず。目を開けてたら、乗り物酔いみたいになって、気分が悪くなってたと思う。汀ちゃんの言ってた通りだね。

一度大きく体がゆれて、ガクンツという衝撃があった。

「何？ もう着いたの？」

見えないから、様子が分らない。キョロキョロと頭をふって、流と汀ちゃんにたずねてみる。

「残念だけど、ちがうんだ。ここは早池峰の女神の守護を受けた、社の一つだよ。一息には飛んで行けないけど、こうやって早池峰の力をたどって、力を分けてもらって、女神の御座所まで行くんだ。さあ、また飛ぶよ」

流が答えてくれる。アタシは流の手をギュツと握った。

目を閉じているアタシにとって、握った手から伝わる温度だけが、世界の全部だ。

空気がゆがむ感覚と、体が落ちる感覚を何度かくり返しているうちに、頬に当たる冷たい風を感じた。

すっかり慣れてしまった衝撃があつて、体が止まった。

「メグミちゃん、もう目を開けてもいいよ」

そう言われて、おそろおそろ目を開けてみる。まぶたの上にあつた『目隠し草』の二枚の葉っぱは、スルリとはがれて落ちた。

最初に目に入ったのは、ゴロゴロと石が転がった地面。そして全体的に、かすんで見える風景。

「ここが　ここが早池峰の女神様の、御座所ってトコなの？」

夏なのに、肌に触れる風、肺に流れてくる空気はとても冷たい。Ｔシャツのそでからのぞく腕に、鳥肌が立っている。

「御座所って言われる奥宮は、まだ上だよ。さすがに神様が直接守っている場所だからね。いきなり飛んで行く、ってワケにはいかなんだ。ここから少し歩くけど、ガマンして」

「うん、大丈夫だよ」

そうだ。少しくらい、苦しい思いをしなくちゃいけないんだ。アタシのせいで、こんな事になったんだもん。

「早く行こう」

立ち止まっていると、吹いてくる風に体温を持つていかれる。動いている方が、温かいかも知れない。

歩き出そうとしたアタシは、そでを引っ張られる感覚で足を止めた。

振り返ると、汀ちゃんがＴシャツのそでをつかんでいる。

「待って、メグミちゃん。奥宮に向かう前に、いくつか確認しなきゃいけない事があるの」

「え？　確認？」

「うん。変な事聞くけど、メグミちゃんって、月のモノはあるの？」

月のモノ？　それって……。

「もしかして、生理のコト？」

何でそんな事、聞くんだろう？　見れば、流は居心地悪そうに、どこか別の方向を見ている。

「まだ……始まってないけど。それが何か、関係あるの？」

「ごめんね、変な事聞いて。この早池峰山は、もともと『女人禁制』の山で、女の人を足を踏み入れると山が荒れるって言われてたの。」

今はさすがにそんな事はなくなっただけど、昔は、女の人はこの山に登ってはいけない決まりになってたのよ」

「ふつうの登山客ならかまわないんだけど、今回、オレたちは早池峰の女神に会うために山頂を目指してる。女神の機嫌をそこねないように、出来るだけ作法を守った方がいいと思ってさ」

『女人禁制』とか『作法』とか、いつものアタシの生活の中には存在しない言葉。それが、この場所は『日常』とはちがう事を教えてくれる。

アタシは確かに、「神様の土地」にいるんだ。改めてそう思うと、何だか背筋が伸びた気がしてきた。

「オレは男だし、汀は六歳だから、まだ『人』のうちに数えられない。メグミちゃんはもう七歳を過ぎてるし、もしも月のモノが始まっていた場合は、禁忌に触れる事もあるからね。だから確認させてもらっただ」

流つてば、本当にアタシと同じ歳なの？

何よ、その『キンキ』って？

疑問が、まんま顔に出たみたい。アタシを見て汀ちゃんが説明してくれた。

「『禁忌』って、やってはいけないって事。女の方は早池峰山ではなく、向こうの鶏頭山に登っていたの。でも『女人禁制』もずっと前に解けたけど。だけど、女神様を怒らせたりしないように、メグミちゃんは山頂に向かって息を吐かないように、気をつけて」

ここはアタシの知っている世界じゃない。だから、世界を良く知っているらしい、流と汀ちゃんの言うとおりにしよう。

分ったというしるしに、二人に向かって軽くうなずいて見せた。

流、アタシ、汀ちゃんの順に歩き出した。

山頂つて、アタシの向かう先だよ。その方向に息を吐かないなんて、大丈夫なのかどうか不安だったけど。

でも歩き出してみたら、それどころじゃないのが分った。

足元は大きな石や、とんがった石がゴロゴロしていて、下を向い

て注意して歩かないと危なくってしょうがない。

しばらくの間、誰も何もしゃべらずに、ただ歩いていた。

動いたからかな。さっきほど冷たい空気は気にならなくなってきた。……空気は気にならなくなってきたけど……。

「ねえ……」

返事はない。

「ねえ、誰か何かしゃべってよ」

「メグミちゃん、疲れた？」

「いや、そうじゃなくて」

顔をあげるわけには、いかない。山頂に向かって息をしちゃいけないから。周りの景色を見る事も出来ない。

「下ばかり見てるからさ。話でもしてないと、気分が落ち込んできちゃう」

「それも、そうか。じゃ、何を話す？」

「うーん、何って言われても……」

転ばないように、気をつけて。顔をあげないように、注意して。

「あ、そーだ。早池峰山の女神様って、どんな人なの？」

言ってしまったから、気がついた。『女神様』って言うてんのに、『人』って何だよ？ 自分の言葉に、思わず笑っちゃう。おっと、危ない危ない。山の上に向かって、息を吐いちゃいけないんだった。「早池峰の女神の事か。そうだね。少しは気がまぎれるかも」

アタシの前を歩いていた流が、ちよつとだけ笑ったような気がした。見たワケじゃないから、よく分ないけど。でもきつと、まちがってないと思う。

それから歩くテンポに合わせて、早池峰山の女神にまつわる話をしてくれた。

昔むかし、姉妹の女神がいて、ずっと二人で旅をしてきた。

ある時、遠野の小出こいでという場所にある峠に差しかかった時、早池峰山の姿を見て、「何とかしてあの美しい山の神様になりたいもの

だ」と話し合った。

そこで姉妹は「枕元に清らかな霊花の降りて来た者が、早池峰山の神様になる」と決めて、床に就いた。

姉神の方はすぐに眠ってしまったが、ずるがしこい妹神は寝たふりをしたまま、じつと様子をうかがっていた。

やがて明け方になり、姉神の枕元に蓮華の花が降りて来ると、すぐに飛び起きて花を奪い、「私の枕元に降りて来た」と言って早池峰山に行き、そのまま山の神になってしまった。

残された姉神は五葉山の神になったと伝えられている。

「他にも伝わっているけど、大体は同じタイプかな。話に出て来る女神は、二人姉妹だったり三人姉妹だったりするね。で、妹が姉を出し抜いて早池峰の神様になっちゃうんだ」

流が話してくれたのは、今まで聞いた事もないものだった。

「お姉さんのトコロに来た花を、盗んじやうわけ？ 神様なのに？」
変なの。盗んだり、ウソついたり。ぜんぜん神様っぽくないや。

「うん、神様なのにね。でもこんな女神様だから、一生に一度ならどんな願いもかなえてくれるとか、人のモノを盗んでも許してくれるとか、言われているんだよ」

アタシの後ろからついて来る汀ちゃんが、やっぱり少しだけ笑いながら、流の話に付け足してくれた。

二、三十分くらい歩いたかな。石ばかりだった視界に、木で出来た道が見えてきた。

「ここから山頂までは、木道になってるんだ。少しは歩きやすいと思うよ」

流の言葉通り、ゴロゴロと石の転がる登り道よりも歩きやすかった。やすかったけど。

「……す、すべる……」

何人もの人が、頂上を目指して歩いただろう木の道は、ふみしめられ、けずられ、その上、山頂にかかる霧のせいか、ぬれていてよ

くすべる。

それに、高い山の上って空気がうすいんだっけ？ 息が苦しい。顔をあげずに、ずっと下を向いて歩いているから、よけいにそう感じるのかも知れない。

立ち止まって空を見上げ、思いつきり深呼吸したくなった。

でも、きつとダメ。一度立ち止まったら、歩き出せなくなっちゃう。だからアタシは、歩き続けなくちゃ。

どのくらい歩いたのかな。周りの景色は、すっかり霧の中でボンヤリとしている。

「メグミちゃん、がんばって。もう少しだから」

後ろから汀ちゃんが声をかけてくれた。アタシよりも年下なのに。アタシより、大変だと思うのに。

「うん、ありがとう、汀ちゃん」

ちよっとだけふり返って、汀ちゃんに笑って見せた。

歩いて、登って、いいかげんヒザがガクガクし始めた時、先を行く流の背中にぶつかった。

「ふあっ！ 何？ どうしたの？」

ぶつけた鼻に当たった手を、あわてて口元に移動させて流を見た。

早池峰の女神さま

「メグミちゃん……。お迎えが来てる」

そう言つて、流は少しよけてくれた。そのおかげで道の先が見えた。

霧にぬれた木道が終わつていて、そこには白い鹿がいた。額に金色の星をつけた、白い大きな鹿。

「あれつて、アタシの夢の中に出てきた鹿だ」

「うん、早池峰の女神様のお使いの鹿だね。きつとオレたちを迎えに来たんだ」

アタシは注意深く口元をかくしたまま、脇へよけてくれた流を追いつ越して、白い鹿の前に立つた。

どうしてだか、そうしなくちゃいけないような、そんな気がしたから。

鹿の真つ黒な目が、アタシをじつと見ている。

「来たよ。アタシを赤ちゃんのトコロに、連れて行ってくれる？」

あれだけ体は温まつたはずなのに、ほんの少し立ち止まつただけで、体温がどんどん山の風に持つていかれてしまう。

白い鹿はしばらくアタシをみつめた後、クルリと向きを変えた。

霧をかきわけるように足を進める鹿の、そのピンと立った短いシツポを目印にして、アタシと流と汀ちゃんは山頂の奥宮を目指した。

目の前の鹿の大きな角の先に、ボンヤリと黒いカゲが見えてきた。

「あれが、早池峰山奥宮だよ。メグミちゃん」

流が教えてくれた。

大きなゴツゴツとした、黒い岩。長い刀のような形をしたモノが、何本か立っている。

「奥宮」っていう言葉から想像していた、キレイで人がたくさんいて、神社みたいな建物なんかじゃなくて。

黒い岩の前にある、古ぼけた小さな、お社。それが『早池峰山奥

宮』だった。

色んな意味で、期待を裏切ってくれたお社の前に、あの、夢に出てきた女の人が立っていた。

長い髪に飾った花。七夕の織姫様みたいにヒラヒラした着物。

優しそうに見えるのに、何だか、とてもコワく感じる。

白い鹿が女の人の側に近寄ると、その人は鹿の長い首をそつとなどであげた。

「人」って言うのとは、ちがうのかな。「女神様」だもんなあ。

アタシがそんな事を考えているうちに、女の人視線をコチラに向けた。

「よく来ましたね、メグミ」

「あなたが……早池峰山……奥宮？」

「いかにも。わたくしが、この山の守護。早池峰山奥宮」

「やつと。やつと、たどり着いた。ここが目指してきた、山頂のゴールなんだ。」

『早池峰山奥宮』と名乗った女の人　じゃなくて、女神様は、アタシの後ろに立っていた流と汀ちゃん兄妹に目を移した。

「そう。お前たちが、メグミを案内してくれたのだね。淵の子河童」
「は？　今、何て言った？」

「カップ？　二人が？　はあ？」

口に手を当てたまま、あたしは女神様相手に、スゴい声を出して聞き返してしまった。

だって……カップ？

「よい。すでにここは山頂。よく言われた事を守り、我慢しました。もう手を離しても、禁忌には触れぬよ」

そう言われて、ちよつとだけホツとして、アタシは手を下ろした。

「あの　カップって？」

「おや、知らなかったのですか？　この二人は、カップ淵の子河童。人間ではないのですよ」

え……どういう事？

思わずふり返って、流と汀ちゃんの二人を見る。

「……ごめんね、メグミちゃん。ウソをつくつもりはなかったんだけど……」

「言い出すタイミングがなかったし、それに、せっかく仲良くなったメグミちゃんが、本当の事を知ったら私たちをキライになるかな、って」

さびしそうな、悲しそうな顔をして、二人はアタシに言った。

「そんな……そんな事……」

ないって言える？ あの時、川の土手で『カッパ淵』について二人が話してくれた。その話をアタシは、笑ったんだった。

『カッパなんて、いるワケないじゃない』

アタシの言葉を、流と汀ちゃんの二人はどんな気持ちで……。

「メグミちゃん。オレたちは昔、新家のだんなさんに助けられた河童の、その子孫だよ。」

命を助けられた恩返しに、ずっと新家の子供たちを見てきた。メグミちゃんのおばあちゃんも、メグミちゃんのお母さんも、オレたちの友達だったんだよ」

「だけどやっぱり、河童だって事はだまってたの。いつか恩返しが出来るように、お兄ちゃんと私は、新家の子供たちと仲良くなって友達になった。そして、メグミちゃんに会ったのよ」

「これでようやく、恩返しが出来る。そう思った。だからオレたちは、メグミちゃんの力になるう。メグミちゃんを助けよう、って」

「でもね、メグミちゃん。私たち、本当にメグミちゃんと友達だっと思ってるから。」

メグミちゃんとお話して、遊んで、本当に楽しかったんだから。恩返しだけなんかじゃ、ないからね。信じて、メグミちゃん」

ちよつとだけ笑ったその顔は、やっぱり二人ともよく似てる。兄妹なんだから、当たり前か。

「うん、信じる。だって、二人はアタシを助けてくれたじゃない。」

ココまでつれてきてくれたじゃない。アタシも流と汀ちゃんの事、大事な友達だと思ってる。そりゃ、二人がカツパだって言われて、ちよっとビックリしたけど」

アタシはまっすぐ、早池峰山の女神様の方を見た。

「カツパでも人間でも、友達だって事に変わりはないよ」

二人は約束通り、女神様の御座所まで案内してくれたんだもん。次は、アタシががんばらなくちゃ。

「早池峰の女神様。赤ちゃんを。赤ちゃんをパパとママに、返して下さい。お願いします」

アタシを見ている、奥宮の女神様の視線がイタい。全身に見えない細いハリが、チクチクとささっているみたい。

「その願いを、かなえてあげる事は、出来ません」

冷たく静かで、そっけない女神様の言葉。

「どうして？ どうして、返してくれないの？ あなたが勝手に、赤ちゃんをつれて行ったんじゃない。だからアタシが、つれ戻しに来たのよ。赤ちゃんを返してよ」

「メグミちゃん、ねえ、ちよっと……」

アタシの言葉をさえぎるように、汀ちゃんが後ろから腕を引つ張ったけど、その手をふりはらって言葉を続けた。

「あなたは一生に一度なら、どんな願いもかなえてくれるんでしょ？ だったらお願いよ。赤ちゃんを返して！」

アタシの怒鳴り声にも、相手の表情は動かない。

「それでは、あの時『赤ん坊なんかいららない』と、そう願ったのは本心ではなかったと言うのですか？」

女神様のその一言は、アタシの胸につきささった。一瞬、返す言葉にツマる。

「そ、それは……。そんなの、本気じゃなかったわよ。あたり前でしょ、決まってるじゃない」

精一杯の強がり。ようやく、これだけの言葉をしぼり出した。でも。

「それは、嘘。あの時、そなたが口にした言葉は、本心から出たものだった。でなくては、わたくしに届くはずはないのです」

必死に否定したアタシの言葉は、あつという間に打ちくだかれてしまった。

くやしい。何も言い返せない。

赤ちゃんをいらないと思ったのは、アタシの本音。

そんな自分の「本当」をつきつけられて、思わずウソをついてしまったアタシ。ココに来てまで、ウソをついてしまうアタシを、簡単に見破ってしまった女神様。

アタシはココへ、何をしに来たの？ 少なくとも、女神様に言い訳をするためにじゃあ、なかったはず。

これじゃあ、ココまでつれて来てくれた流と汀ちゃんに合わせる顔がないよ。

自分たちの大事な秘密を明かしてまで、アタシを助けてくれようとしているのに。アタシがこんなじゃ、ダメだ。

「そうだよ。あなたの言う通り、あの時アタシは本気で、赤ちゃんがいなくなればいいと思った。赤ちゃんさえいなければ、パパとママはまた、アタシだけを見てくれる。そう思ったから。でも」

泣きさけんでいたママと、その背中を支えていたパパの姿。二人をつらそうに見ていた、おばあちゃん。

誰もアタシの事を見てなかった。赤ちゃんが戻ってこなかったら？ きつとパパもママも、アタシを見てくれないままだと思う。

「でも、ダメなんだ。赤ちゃんがいなかった事には、ならないよ。

パパもママも、赤ちゃんがいなくなった事を忘れたりしない。ううん、忘れるはずがない。もしもパパとママがアタシを見てくれてもそれは、アタシの後ろに赤ちゃんを見ているんだと思うし、それに赤ちゃんがいなくなった本当の理由が、アタシなんだって、パパとママが知ったりしたら」

二人は絶対に、アタシの事を許してくれないだろう。

そんな事、考えただけで体がふるえる。

「ならばわたくしが、そなたの両親から赤子の記憶を消してあげましょう。そうすれば二人は、そなただけを見てくれるでしょう」

アタシの心をテストするように、甘い言葉が女神様の口からこぼれた。

一瞬、気持ちグラリと動く。

赤ちゃんの記憶がなくなる？　赤ちゃんがいた事を、パパとママが忘れる？　それなら……。

「そうすれば父も母も、そなただけを見てくれるでしょう。どうです？」

アタシだけを……見てくれる？

右へ左へとゆれていたアタシは、流の声にハツとした。

「メグミちゃん、思い出してよ！　君はココへ、何をしに来たのか。何を願いに来たのかを！」

何を？　何をしに？　何を願いに？　決まってる、そんな事。

「アタシは……　赤ちゃんを取り戻しに、返してもらったために来たのよ。たとえパパとママが赤ちゃんの事を忘れても、アタシは忘れない。パパとママを見るたびに、自分のやった事を思い出すわ」

女神様がマジマジとアタシの顔を見た。おかしいけど、この時初めて、女神様がアタシを見たような気がした。多分、それはハズレてないんだろうな。

きつと女神様は、今になるまでアタシを見てなかったんだ。これまでアタシが感じてきた女神様の視線は、アタシの内側を見ていたのかも知れない。

「自分の罪悪感がつらいと言うなら、そなたの記憶も消してあげますよ。どうしますか？」

「そんなコトしなくていいから、赤ちゃんを返して」
アタシもまっすぐに女神様を見る。

もう迷わない。迷ってる場合じゃ、ないんだから。絶対に赤ちゃんを、つれて帰るんだから。

「心が決まったようですね。しかしだからと言って、簡単に赤ん坊

を返してあげるわけにはいきません。そなたの一生に一度の願いは、すでにかなえられてしまいました。このまますんなりと、そなたの二度目の願いをかなえるわけには、いかないのです」

「じゃあ、どうすればいいの？ どうすれば、赤ちゃんを返してもらえるの？」

何を言われるのか、正直、とてもコワかった。でもココまで来て、引き下がるワケにもいかないんだ。

アタシは精一杯強がって、女神様をにらみつけた。

「ホホ。そんなに怖がらなくても、大丈夫。何も取って食おうとか、生命を差し出せなんて事は言いません。でも、一生に一度の願い、それに見合うだけのものを差し出してもらいます。当然でしょう？」

うん、確かにその通りだと思う。

アタシは一度、願いをかなえてもらった。自分の本心からの願いを。

それをなかった事にしてもらうには、やっぱりタダで、と言うのは虫がよすぎるか。

「分ったわ。アタシが持っているモノなら、何でもあげるわ」

ゴクリとツバを飲みこむ。喉の鳴る音が、妙に大きく感じられた気がした。

「では……」

急に女神様が大きくなったように思えた。ううん、実際に大きくなったワケじゃない。女神様の大きさは変わらないのに、アタシが感じる女神様の気配が大きくなったって言うのか。うまく伝えられないよ。

「そなたの記憶をもらいましょう」

「記憶……アタシの？」

アタシへの罰

「そうです。この遠野に来てから子河童たちと出会い、わたくしの元までやって来た、その記憶を頂きます」

「それって……」

それって、流や汀ちゃんたちと過ごした時間の記憶を……、アタシの友達との思い出が、全部消えちゃうって事？

「そんな」

「そなたが望んでいるのは、そう言う事なのです。そなたが願ったのは、天から与えられた一つの生命を、この世から消し去る事。決して許されない願いを、そなたは口にしたのでですよ」

厳しい言葉がアタシにつきささる。

「許されない願いをなかつた事にする。それに見合うのは、願った本人が大事に思っている『心』しかないのです」

打ちのめされた気がした。『本心』で願った事は、『本心』でなければ取り戻せない。それだけの事を、アタシは望んだんだ。

ゆっくりとふり返る。

アタシよりも大人びた目をした流。人なつつこい笑顔のカワイイ汀ちゃん。

知り合いもないこの遠野で、アタシと仲良くしてくれた二人。

真剣にアタシの話を聞いてくれた。こんな所まで、アタシをつれて来てくれた。

大事なアタシの「友達」。

なのに、その二人の事を忘れなきゃいけないなんて。

「そんなの……ヤダ……」

「でもメグミちゃん。赤ちゃんが……」

「だって！」

涙があふれてきた。二人の顔がにじんで、ゆがんで見えた。

「せつかく仲良くなれたのに！ 二人はアタシの事を助けてくれた

のに！ それなのにアタシは、流の事も汀ちゃんも忘れちゃうんだよ！」

学校にだって、こんなに大切に思える友達はいないよ。

「忘れたくない！ 忘れるなんて、ヤダ！」

しゃくり上げるアタシの手を、優しい温度が包みこんだ。

「泣かないで、メグミちゃん」

「汀ちゃん」

「そんなにオレたちの事を、思ってくれてありがとう、メグミちゃん」

「流」

二人がそつと、アタシの手を握ってくれている。

「大丈夫だよ。私たちは忘れないから」

「メグミちゃんが忘れても、オレたちがずっと覚えているから」

手から伝わる温度と同じ、優しく、柔らかな笑顔。

「あつたかい」

二人の本当の姿は、カップなんだって。アタシ、カップの手つてもつと冷たくてヌルヌルしてて、気持ち悪いと思ってた。だけど流と汀ちゃんの手は、あつたかくつて、気持ちがいい。

このあつたかい手を、ずっと離したくないと思った。あたしが心細くなった時に、いつも力づけてくれた優しい手。

「大丈夫だよ、メグミちゃん。一度は友達になれたんだ。次に会った時だって、オレたちはきっと友達になれるよ」

「メグミちゃんが忘れても、私とお兄ちゃんは忘れないよ。私たちが本当は『河童』だって知っても、友達だって言ってくれたメグミちゃんを、絶対に絶対に忘れないから」

「だから、メグミちゃん」

「今は迷わず、赤ちゃんをつれて帰って」

強い視線。迷わない視線。

「ありがとう、流、汀ちゃん。二人に会えて、アタシ、本当によかったと思ってる。二人と友達になれて、本当によかったと思っ

てる。これで流と汀ちゃんの事を忘れちゃったとしても……」

アタシは顔をあげて、しっかりと二人を見た。ちゃんと伝えなきゃ。忘れてしまうなら、なおさらに。

「二人の事、忘れちゃったとしても、ずっとずっと友達だからね！」

「うん！」

とびつきの笑顔で、流と汀ちゃんがうなずいてくれた。

アタシは流と汀ちゃんと手をつないだまま、女神様の方へ向き直った。

「早池峰の女神様。決めました。アタシの記憶を差し上げます。だから、赤ちゃんを　妹の笑美を返して下さい」

赤ちゃんを……初めて『妹』って呼んだ。『笑美』って。アタシの妹。

「決めましたね。分りました。そなたの願いをかなえてあげましょう」

静かに言った女神様は、両手を空に向けて伸ばした。見ていると空中に光の球があらわれた。うすいピンク色をした光の球は、どんどん大きくなって、ちょうど丸い形をした座布団と同じくらいの大きさになった。

おばあちゃん家にあつたのと、おんなじくらいかな。よくママが、笑美のコト寝かしながら遊んでたっけ。

そんな事を思っているうちに、光の球は女神様の両手の腕の中におりて来た。

うすピンク色の光が消えるとそこには、女神様に抱かれてスヤスヤ眠る、小さなアタシの妹がいた。

「……赤ちゃん」

「さあ、メグミ。そなたの望み、そなたの妹です。しっかりと抱いて上げなさい」

そっと目の前に差し出された赤ちゃんは、本当に小さくて、ちょっとした事でコワれてしまいそうだった。

「そう、頭はこうやってヒジに乗せて。おしりを支えるんだ」

流が赤ちゃんの抱き方を教えてくれた。眠ってる赤ちゃんは、何だかグンニヤリしていて、それでいてとても温かった。小さな目、鼻、口。こんなに小さいのに、手にも足にもちゃんと、指も爪もある。この体の中では、アタシと同じように、心臓がドキドキと音を立てて動いてるんだ。

「カワイイ赤ちゃんだね。メグミちゃんの妹、笑美ちゃんって言うんだ」

「うん。この笑美ちゃんがいてくれたから私たち、メグミちゃんと友達になれたのね」

ハッとした。そうだったんだ。パパとママがあんまり赤ちゃんのコトばかり見てるから、アタシはカツパ淵に行っただった。もしも赤ちゃんがいなかったら、川へ遊びに行く事はなかったかもしれない。

「そうだね。二人と仲良くなれたのは、笑美のおかげなんだね」

すっかりとした重さを感じさせる赤ちゃんは、アタシの腕の中で安心してきつた様子で、静かに寝息をたてている。

よきかな
「善哉」

女神様が厳かに言った。

「では約束通りそろそろ、そなたの記憶を頂きましょう」

「あ、まって。ちょっとだけ、まって下さい」

今、記憶を消されちゃったら、大事なコトが伝えられなくなっちゃうよ。

女神様がうなずいてくれたのを確かめてから、流と汀ちゃんの二人に視線を戻した。

「あの……何て言ったらいいのか……。ここまで来れたのも、妹を返してもらえたのも、流と汀ちゃんのおかげだよ。本当にありがとう」

二人の兄妹に向かって、頭を下げる。

考えてみたら、初めてかも知れない。誰かに頭を下げるほど、感

謝したことなんて。きつと誰でも、心の底から感謝した時には、自然と頭が下がるんだ。だからコレが、人間の出来る一番素直な感謝の形なんだと思う。

「オレたちは、何もしてないよ。ただメグミちゃんの味方だった事と、山頂まで道案内をしたただだよ」

「がんばったのは、メグミちゃんだもの。赤ちゃんを返してもらえたのだって、メグミちゃんの力だよ。私もお兄ちゃんも、メグミちゃんのがんばりがなかったら、ここまで来ること出来なかったと思うし」

本当にこのまま、二人の事を忘れてしまふのかな？ もう二人を見かけても、何とも思わなくなっちゃうのかな？

二人の事、全部忘れてしまわないように、流の顔と汀ちゃんの顔をジッと見た。絶対に、全部忘れたりしない。きつと覚えてる。覚えておくんだ。

「アタシ、二人の事、きつと思い出すから。忘れてしまったりしないから」

「うん。オレたちも、メグミちゃんを忘れたりしないよ」

「大丈夫。きつとまた会えるから。今は赤ちゃんを、早くお母さんに返してあげて」

流と汀ちゃんの優しい笑顔をしっかりと目に焼き付けて、アタシはもう一度、深く頭を下げた。

「本当に 本当にありがとう」

頭をあげると、赤ちゃんを抱いて女神様の方へ向き直った。

「……お願いします」

「わかりました。さあ、こちらへ」

二・三步、女神様の方へ近づく。おでこに女神様の白い手が触れた。少しヒンヤリとして、心地いい女神様の手。

「心配しなくても、そなたと赤ん坊は、ちゃんと無事に送り届けてあげます」

自然とまぶたが降りてくる。赤ちゃんを落とさないように、しっ

かりと抱える。

目を閉じてるんだから、視界は暗いはずなのに。なのに、まぶたの裏には光が見えていた。何だかとても、気持ちがいいよ。

その気持ちよさに心と体をあずけて、アタシは光の中に浮かんでいった。

ふわふわと。ぷかぷかと。

腕の中で眠る赤ちゃんと一緒に、アタシは光に包まれていった。

新しい一歩

「おい、メグミー。早くしろよー！」

玄関でパパが呼んでいる。

「はい、ちよつとまってるー！」

最後の荷物をカバンにつめて、忘れ物がないかどうか、部屋の中を見回す。

うん、大丈夫。忘れ物はないみたい。

自分のカバンと、横に置いてあった大きなカバンを持ち上げる。

おおっと、こんなに重たいんだ、赤ちゃん用の荷物って。色々が入ってるもんねえ。

オムツに、タオルに、ミルクに、着替え。赤ちゃんを育てるって、大変なんだ。

妹がいなくなつたって、大騒ぎになったあの日。

いつの間にかおばあちゃんの家を抜け出してしまったアタシの事に気がつき、ママはそれこそ、狂ったように泣きさげんだんだって。アタシも赤ちゃんも、いなくなってしまったって。

お巡りさんや近所の人たちがみんな、アタシと妹を探し回ってくれたらしい。

夕方近くになって、カップ淵の「お乳の社」と呼ばれているお社で、眠っているアタシは見つかったって言われた。

腕にしっかりと妹を抱いて。

目が覚めたアタシは、おばあちゃんの家に戻って、色んな事を聞かれたんだけど……。でも、何も答えられなかった。

赤ちゃんはどこで見つかったのか？

どうやってつれ戻したのか？

誰かにつれ去られたのか？

見つけられるまでどこにいたのか？
誰かと一緒だったのか？
などなど。

だけど、いくら質問されたって、何も分らないし、何も覚えていないから答えようがなかった。

ママは涙で顔をクチャクチャにして、アタシと妹を抱きしめてくれた。

パパはちよつと怒ったような、それでいて安心したような顔をしないで、側に立っていた。

おばあちゃんは涙ぐみながら、だまって温かいココアを出してくれた。

知らないうちに冷えてしまった体に、温かいココアはすごくおいしく感じられた。

結局アタシが何も覚えていない事が分ると、大人の人たちは納得がいかない表情で、それでもアタシと赤ちゃんが無事に戻ってきたのを喜び、安心して帰って行った。

帰りぎわにお巡りさんが、「早池峰さんの気まぐれか、河童のいたずらかも知れん。何にしても、二人が無事に見つかって良かったよ」と言い残していた。

起き出して元気に泣き声をあげた赤ちゃんは、よほどお腹が空いていたのか、ママのおっぱいに吸いついている。

自分でも不思議なほど、落ち着いてそれを見ているアタシがいる。そんなに時間がたったワケじゃないのに、今では心に波が立つ事もない。赤ちゃんを抱いているママを見ても、もうイヤじゃない。

アタシの中から抜け落ちてる記憶の中で、一体何があったんだろう？アタシと赤ちゃんは、どこに行つて、何をしていたんだろう？

「おい、まだかあ！」

パパの少しイラついた呼び声に、アタシはハッとして考え事から

気持ちに戻した。

「はあい、今行くからー！」

大きなカバンと小さなカバンを持って、アタシは部屋を出た。

玄関ではおばあちゃんとパパが待っていた。大きい方のカバンをパパに預けて、アタシはおばあちゃんにあいさつをした。

「おばあちゃん、お世話になりました」

「はいはい、どういたしまして。色々あって大変だったけど、忘れられない夏休みになったねえ」

アタシはふり向いて、おばあちゃんの家を見ながら答えた。

「うん、そうだね。いつもの夏休みとは、ちがった夏休みだったもんね。忘れられないよ」

また待たせるとパパが文句言うから、とクツをはいていると、おばあちゃんが紙袋を差し出してくれた。

「はい、コレ。お土産にどうぞ」

「うわ、コレって『明がらす』？ アタシ、このお菓子、大好きなの。ありがとう、おばあちゃん」

パパとママと赤ちゃんの待っている車に乗りこむと、窓を開けて顔を出した。

「おばあちゃん、またね！」

「ああ、またいつでもおいで」

そしてアタシに顔を寄せて、コソツと教えてくれた。

「メグミちゃんが生まれた時も、パパとママは大事に大事にしてくれたんだよ。一分だって手離さないくらい、いつも二人で抱っこしていたんだからね」

「ホント!？」

聞き返したアタシの声は、出発するぞ、と言うパパの声に消されてしまった。

「おばあちゃん、バイバーイ！」

動き出した車の窓から手をふると、おばあちゃんも手をふってくれた。

「さあ、家に帰るぞ」

運転席のパパがバックミラーで、後ろの座席のアタシと赤ちゃんを見た。

「メグミ。笑美の事、見ててね」

助手席のママが、アタシに向かって笑いかけてくれた。

「うん、分った」

アタシのとなりには、チャイルドシートがあつて、赤ちゃんが静かに眠っている。

「おっぱいは飲んだの？」

「さつき、お腹いっぱいね。しばらくは、起きないと思うわよ」

「ふーん」

アタシは赤ちゃんの顔をのぞきこんだ。

ちっちゃな鼻。息をすると、ピクピクする。

ちっちゃな口。歯はまだ全然はえてなくて。だけど上と下の歯ぐきの間に、ピンク色の舌をフタみたいにピタツとはさんでいる。

うっすいマユ毛。ほっそい髪の毛。生まれた時から、毛って生えてるんだ。

視線を上げれば車は、遠野市内へ向かう道の途中にある「奥田橋」という橋を渡るところだった。

橋の下を流れる小さな川。この川も、あのカッパ淵につながっているのかな？

そんなコトを思いながら橋の下に目を向けると、土手に人が立って手をふっているのが見えた。

男の子と女の子。兄妹かな？

でも、あれ？ どうかで見たことある？

車は橋を通りすぎ、二人の姿は小さく小さくなって行って、とうとう見えなくなってしまうた。

あれは誰だったんだろう？ 知らない人のはずなのに、何だかとても心が動く。

すぐくすぐく、大事な事を忘れていて、思い出せないような感じ。

チャイルドシートの中の妹が、眠りながらアタシの指を握った。
その温かくてやわらかなキュツという感触に気づいた時、アタシは
急に涙があふれて止まらなくなってしまった。

アタシ、どうしちゃったんだろう？

「メグミ。パパとママ、おばあちゃんに叱られちゃったわ」

助手席からママが声をかけてきた。

「もっと気をつけないと、メグミにさびしい思いをさせてるって。
まだまだ親に甘えたい年頃なのに、ムリに大人みたいに我慢をさせ
てる、ってね」

「ママ……」

「赤ちゃんの事ばかりで、さびしい思いをさせてごめんね、メグ
ミ」

ほっぺたを流れる涙があったかい。

（よかったね、メグミちゃん）

（お父さんもお母さんも、ちゃんとメグミちゃんの事、思ってくれ
てるじゃないか）

胸の奥が見えないモノで満たされて、いっぱいになった。

「流……汀ちゃん……」

思い出した。優しい兄妹の声を。

知り合って短いアタシのために、力をかしてくれた不思議なカツ
パの兄妹の事。

「メグミ、どうしたの？ どこか痛いのか？」

ママが泣いてるアタシをのぞき込んで、ビックリして聞いてきた。
「ううん、ちがうの。うれしくて。アタシこそ、ごめんなさい。
色々とヒドイ事言ったりして」

自然と言葉が口から出て来る。

大きな大きな重しが取れて、心の一番奥にあった箱のフタが開い
たような気がした。

箱の中につまっていたイヤなモノが、一気にはじけ飛んだみたい。
まるで、誕生日に鳴らすクラッカーみたいだ。

アタシは眠っている笑美を見て、そつとつぶやいた。

「こんなお姉ちゃんだけど、ヨロシクね」

そして窓の外を見て、大事な友達に思いを飛ばした。

（ありがとう、流。ありがとう、汀ちゃん。アタシ、もう大丈夫だよ。またいつか、きっと会えるよね）

窓の外に広がる空は青くて、広くて。

アタシにとって、忘れられない夏休みは、まだまだ終わりそうにない。

完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5209t/>

河童と女神と夏休み～あたしの遠野物語～

2011年6月13日23時26分発行